

三日月

西脇竹比古

三日月を見ると私は、魚が釣り針を見て誘われるような、また鳥が弓を見て恐がるような、そんな気分になる。水のなかや空の上から、本物の夜空とそれを映し出す海を見て、まるで三日月がふたつに増えたかのような光景が目に見えぶのだ。

「そんなの全然思い付かないわ」

「そうなの？」

「松ちゃんだけだよ、きつと」

チャイムが鳴った。騒がしかった教室に先生が入ると徐々に静まっていく。先生の話す連絡事項を傍らに、私を含めたみんなはバレないように帰りの準備を整える。はい、じゃあ今日はこれでおしまい！と先生が元気に言う。

「起立、気を付け、礼。さようならー」

また教室中に騒がしさが戻る。おしゃべりしたり、箒や塵取りを出したり、椅子を机の上に乗せたり、雑巾を洗うための水を汲みに行ったり。

「松ちゃん、帰ろー」

らないのだ……。私はただ呆然と突っ立っていた。すすり泣く音も聞こえる。校長の話もなんとなく聞こえる。それが黙祷のとき、完全な無音となった。

それからのことはよく覚えていない。先生方はなるべく日常的であろうと努めたことだろうし、ショックの大きい子はスクールカウンセラーのところへ行き、それ以外の子は普通に授業を受け、なにも変わらない時間をみんなでつくろうとしていたのかも知れない。

無言の帰り道も通り過ぎ、家に着き、ごはんを食べてそのまま部屋に入った。勉強をしながら大好きな歌手のCDをかけたが、落ち着かない。むしろ苛立つてきて、CDを止めた。また静かだ。シャーペンをもた手に取る気にもなれず、ジツとしていたら「お風呂に入っつてね」と言う母の声がした。それでもしばらくそこから動かなかったし、動こうとも思わなかった。が、他にすることもなかったので、仕方なく着替えを持って部屋を出た。

その日はとくに湯船に入るまでの時間がいやだった。その分、湯船に浸かってようやく肩の荷が全て降りた感じがした。同時に、不意に彼女の顔を思い出し、泣いた。泣いた。ああ、ようやく涙が出た。風呂場に泣き声が響く。叫び声が、水面の波紋となった。彼女の死を、筒井さんの死をはじめて知ったのだ。

風呂から出て、やはり泣き声は両親に聞かれていた。大

筒井さんと私は、反対方向の電車に乗るまで一緒に帰っているんな話をするのだ。スイーツ店のことやクラス内の恋のことは話しても、あの三日月のことはもう話には出なかった。電車が来て、じゃーねー、と言って別れる。そのまま変わらない道を通って、変わらない家に帰る。ごはんを食べて風呂に入ってテスト勉強をして電気を消してベッドに入って……。その夜は真つ暗だった。

次の朝、着替えてごはんを食べて電車に乗って、そんな変わらない時間を経て学校へ着いた。騒がしい教室のなかに進んで席に座る。チャイムが鳴って先生が教室へ入ると、おはようございまーすと眠たそうな私たちの声。

「おはよう。あのー突然だけど、これから集会を開きますんで体育館へ行きましょう」

と先生が告げ、なんだろうと思って体育館へ行く。整列した全校生徒の前に校長が立つ。

「突然の集会でなにかと思っただでしょうが……G組の筒井さんについてです」

そういえば今朝、筒井さんを見なかった。

「……彼女のご両親から連絡がありました、今朝、筒井さんが息を引き取られたそうです。昨晚のうちに心臓が止まったものと思われるとのこと……」

体育館の空気が冷たくなったのは、多分みんな感じたことだろう。昨日まで人の座っていたあの席に、もう誰も座

丈夫？と問われて、ちょっと悲しいことがあっただけ、と答えた。ベッドに入ってから泣けなかった。眠れないので窓から見える、現われはじめた三日月を見ていた。松ちゃん松ちゃんと呼ばれている気がする。まだそっちに行けない、ごめんね、と胸のうちに苦笑いを作った。

気づけば私は宙に浮いていた。知らない街の真上にいた。しかし急降下を続けている。地面に突っ込む！私は必死に手足をジタバタ動かした。なんとか衝突を免れ、また青空に浮かびはじめた。街には人もいなく車もなく、私一人だけだった。徐々に地上から離れていき、ビルの上を蹴飛ばして高度を上げた。街を離れて、空のところどころに浮く雲を超えた。いつの間にか太陽が沈んでしまつて、真つ黒になった夜空。見上げたら舟のような三日月の上に乗った筒井さんがいた。影で顔が見えない彼女は、割に明るい口調で言った。

「松ちゃん、私が死んで悲しいの？」

私は言った。

「……………！」

私の部屋の天井が目映った。目が覚めたらしい。夢で見たような青空で、窓辺にスズメがチュンチュンと鳴いている。……私はあるとき、彼女に言ったのだろうか？ずつと考えてきたが、今も思い出せない。